

令和4年度
心の輪を広げる体験作文
障害者週間のポスター
作品集

群馬県
群馬県肢体不自由児協会



あいさつ

群馬県知事

山本 一太

「心の輪を広げる体験作文」、「障害者週間のポスター」の募集に多くの方々から御応募をいただき、深く感謝申し上げます。今年度は、県内の小中学校・高等学校等の児童・生徒の皆様から、作文の部で七十五作品、ポスターの部で二十四作品の応募がありました。どの作品も、障害のある人となし人との関わりを通じた思いやりの心が表現されており、将来を担う若い皆様の心に、このような気持ちが育まれていることをとても嬉しく思います。それらの作品の中から、十五作品を優秀作品として表彰することにいたしました。

県では、障害者施策の基本となる「バリアフリーぐんま障害者プラン8」のもと、「全ての県民が、障害の有無にかかわらず、互いに人格と個性を尊重し合いながら、地域で共に暮らし、支え合い、安心して暮らすことができる共生社会の実現」を目指し、様々な施策を推進しています。この作文・ポスターの募集もその一環として行っており、今年度の優秀作品をまとめたこの作品集を、多くの方々に御覧いただくことで、障害や障害のある方に対する理解がより一層深まることを期待しております。

結びに、作品の応募に当たり、御協力いただきました関係者の皆様に厚く御礼申し上げ、あいさついたします。

令和四年十二月

入賞作品

心の輪を広げる体験作文【知事表彰】

■小学生部門

最優秀賞	わたしの妹	太田市立宝泉小学校	二年	猪熊	こはる	1
優秀賞	障がいとは	渋川市立豊秋小学校	六年	齋藤	芽吹	2
佳作	私の両親	太田市立鳥之郷小学校	六年	天笠	莉愛	3

■中学生部門

最優秀賞	障がいを理解する	館林市立多々良中学校	三年	落合	桃果	4
優秀賞	努力の積み重ね	太田市立城東中学校	二年	高橋	惺蘭	6
佳作	もう大丈夫	前橋市立木瀬中学校	二年	木原	暁輝	7

■高校生部門

最優秀賞	障害は「見る」のではなく「向き合う」	群馬県立伊勢崎興陽高等学校	三年	田沼	優月	8
優秀賞	学び、得た知識を。	群馬県立安中総合学園高等学校	三年	関	朱里	10
佳作	偏見	群馬県立安中総合学園高等学校	三年	小澤	耀加	12

心の輪を広げる体験作文【肢体不自由児協会会長表彰】

■小学生部門

一人一人が平等に生きられる環境を

太田市立宝泉小学校

六年

北爪 陽菜

……

15

■中学生部門

ケガをきっかけに

太田市立城東中学校

一年

工藤 香乃

……

16

障害者週間のポスター【知事表彰】

■小学生部門

最優秀賞

みんながくらしやすい社会

前橋市立天川小学校

五年

三澤 優太

■中学生部門

最優秀賞

自由に動ける社会へ

高崎市立第一中学校

三年

水出 向日葵

優秀賞

身近なマークを手の上に

館林市立多々良中学校

二年

佐藤 彩未

佳作

みんなが暮らしやすい社会

太田市立東中学校

三年

坂岩 日和

心の輪を広げる体験作文

【知事表彰】



わたしの妹

太田市立宝泉小学校

二年 猪熊 こはる

わたしの妹は、ダウンしようぐんです。

ダウンしようぐんは、生まれつき、きんにくがよわいので、ゆっくり、せいちょうします。見る力、聞く力もよわいので妹は、六さいだけど、まだ言ばがしゃべれません。なので何をしたいかもわかりません。

いつもリビングのカーペットでゴロゴロしていたり、じゃんけんをしたり、いろいろしてあそんでいます。ときには、外でもあそびます。妹は、ストライダーや、かけっこ、シャボン玉が大好きです。

妹のほっぺたは、プニプニして、やわらかいです。からだがつともやわらかいので、だきまくらにしたいぐらいです。わたしは、妹をギュツとするのが大好きです。とても、

きもちよいです。

妹は、せいちょうするのがゆっくりなので、いろいろなことがおそいです。

赤ちゃんのとき、なかなかあるけなくてしんぱいしました。いろいろなくんれんをして、ようやくあるけるようになりました。いまでも、ジャンプのくんれんやかた足で立つくんれんをしています。くんれんしてくれるばしょには、わたしもいっしょに行きます。妹は、わたしのマネをすることが好きなので、いっしょに行つていっしょにくんれんします。先生もやさしいので、わたしもたのしいです。言ばがまだ、しゃべれないけど、たくさん話しかけています。早くお話しできたらいいなと思つています。

ときどきはケンカもします。テレビのとりあいや、おもちゃのとりあいもします。二人で、「ごめんなさい」をして、おわります。妹は「ね」しか言えないけど、でもかわいいじまんの妹です。

妹は、らい年ほうせん小学校にきます。しえんきゆうだけど、みんなにおいつけるかしんぱいです。でも、いっしょにとう校するのがとてもたのしみです。お姉ちゃんとして、さいごまでめんどうを見ます。がんばります。

障がいとは

渋川市立豊秋小学校

六年 齋藤芽吹

私は、夏休み母のつとめている放課後等デイサービスへ行きました。そこには、小学校一年生から高校三年生までの支援の必要な子たちがかよっています。

母は毎日、小学校六年生の男の子を家までむかえに行っています。K君との会話は毎朝同じことがくり返されます。「今日、朝ご飯何食べた?」「分かりません。」「ご飯?、パン?」「分かりません。」「朝、何を食べましたか?」「ご飯。」「なぜ、さつき食べた朝ご飯が分からないのだろう。しかも毎日同じ会話。K君は、何が分からなくて「分かりません」と答えているのだろうと思いました。K君は、幼稚園ころ外国で育ったと聞きました。でも、小学校六年生なのだから朝ご飯くらい理解していても良いのではないかと思ってしまいました。

た。母や職員の方の話によると、「分かりません」「知りません」と答えれば話が済んだのかもしれないといっていました。だからここでは、「分かりません」や「知りません」では終わらせずに、自分の言葉を導き出すようにしているそうです。

そんなK君がぬりえをしているところを見ました。色々な色を使い、小学生とは思えないほどすてきな作品ができていました。私は、K君すごいなと思いました。

つついできないことに目がいってしまふけれど、私にはできない、すばらしいことがK君にもあるのだと実感しました。

I君は、小学校五年生の男の子です。トランポリンをとてもがんばっていて、私と同じトランポリンの大会に出場しました。朝、I

君のところに行き、「おはよう、今日がんばってね。」と声をかけました。「うん。」と答えたI君は、元気がなく、きん張しているのかなと思いました。確かにきん張するよなと思いつつながらI君の演技を見ていました。すると、演技の途中で止まってしまいました。見ると、ショックでI君は泣いていました。「そうだよな、練習がんばってきて、本番失敗しちゃくやしいよな。」と思いました。

夏休み、I君が練習しているのを見ると、今まで曲がっていた手足がピンとのび、真剣に練習に取り組んでいました。

私はI君のことを、小学校二年生から知っています。少しのことで泣いてしまい、いっしょに遊ぶのも少し大変な子だなと感じていました。そんなI君もあの失敗をのりこえ、楽しそうにトランポリンをやっているのを見て、人は変わるのだなと思いました。

私は、この夏休み、障がいとは何だろうと考えました。障がいのある人の体や心にあるのではなく、日常生活の中で障がいのある人が困ることが障がいなのです。私たちが障がいをつくるのではなく、いっしょに困っていることを解決する方法を考えて、助け合うことが大切なのだと思います。障がいのある人もない人もだれもが安心して暮らせる世の中になつていけば世界が少しは変わると思います。

私の両親

太田市立鳥之郷小学校

六年 天 笠 莉 愛

私の両親は耳が聞こえない障がいを持っています。両親の一人以上が聴覚障がいを持つ、聞こえる子どもがCODA(コーダ)と言います。つまり、私はCODAです。

私の両親の耳が聞こえないということに対して、私が小さい時は「大きくなったら、お母さんとお父さんの耳を聞こえるようにするお医者さんになりたい」と思っていました。大きくなつていくにつれて、「両親の耳が聞こえていたら、自分はどのようになりたいのだろうか」と改めて思うようになりました。でも、今は「両親の耳が聞こえない分、色々な音を聞いて、どんな音がするか教えてあげたい」と思うようになりました。

私は小さいころ、両親をまねして簡単な手

話ができるようになりました。なので、今は簡単な手話で日常会話ができるようになりました。また、私が赤ちゃんの時から両親に連れられて、聴覚障がい団体の行事や手話サークルに参加したり、両親のお友達と家族ぐるみのお付き合いをしたりと色々な聴覚障がい者やCODAや手話ができる聴者、手話通やく土とたくさんの方と出会ってきました。

聴覚障がい者にとって、手話は「言語」です。聴者も聴覚障がい者とのコミュニケーションは筆談はもちろん、手話も覚えてもらえば、言葉のかべをなくせると思います。これからもっと色々な手話を覚えて、両親や聴覚障がいの方に役に立てたらいいなと思います。



障がいを理解する

館林市立多々良中学校

三年 落合 桃 果

私には世間的に認知度が低い障がいを持っています。それは場面緘黙症です。社交性不
安障がいの一種です。

場面緘黙症とは、家などの安心出来る場所
では普通に話す事が出来ますが、学校や職場
などの特定の社会的場面では話す事が出来な
くなってしまふ障がいです。その為、全く話
せないと言う訳ではないので、周りから本人
の性格によるものだとか、自分の意思でわざ
と話していないと誤解される事がありますが、
決して自分の意思で話さない事を選んでい
る訳ではありません。自分から話す場面を人に
聞かれたり、見られたりする事に対して強い
不安や恐怖を感じてしまつて話せなくなつて
しまいます。

私が場面緘黙症と診断されたのは一歳の時

です。それから保育園に入園して集団生活が
始まった頃、私は部屋の隅に座つて他の子達
を見ていました。お友達はもちろん、先生と
も一言も喋りませんでした。けれど、お母さ
んがお迎えに来て、保育園の門を一步でも出
ると、私はお母さんに沢山お話をしたそうで
す。だから私は保育園の中で、「お話ができ
ない子」と誤解されていきました。それはずつ
と卒園まで続きました。保育園から小学校に
上がる前、主治医の先生からは、小学校は通
常学級に行くようにと言われたようですが、
両親の要望で支援学級に入れてもらいました。
そして小学校に入学しました。支援学級では
少人数で学習が出来て、少しずつ不安も解け

ていきました。しかし、私は通常学級の子達
がケンカしている姿やイジメられている姿を
見て怖くなって体調を崩して学校に行けなく
なつていた時期がありました。それは人に対
しての恐怖が強いからです。中には優しく接
してくれた人もいたけれど、どう返したらいい
のか、言葉や表情がわからず固つてしまふ
毎日が本当にとても嫌で辛い日々でした。中
学生になつた今でもそれはあつて、直したい
という気持ちと上手くいかない自分に戸惑つ
ている毎日です。

それと私は、場面緘黙症の他に、潔癖症や
自閉症スペクトラム、アスペルガー症候群な
どがあり、他の人と違ふと感じています。潔
癖症とは、不正や不潔を嫌い、どんなもの
にも妥協しない完全を求める性格を言います。
例えば、他の人が触れている物がバイ菌に汚
染されているという恐怖を感じる為、触る事
が出来ず、触れたら何度も入念に手洗いをし
ます。自閉症スペクトラムとは、正常な社会
的關係を構築する事が出来ず、言葉の使い方
に異常が見られるか、全く言葉を使おうとせ
ず限定的な行動や反復行動が見られる病気で
す。アスペルガー症候群とは、発達障がいの
一つで、社会性・コミュニケーション・想像

力・共感性・イメージする事の障がい、こだわりの強さ、感覚の過敏などを特徴とします。私は、自分では気付かない事は、身近な家族から指摘を受けて直すようにしています。それは、私が将来、人と関わる時に無理なくスムーズに関わりたいたいです。そして、人と話す楽しさを感じたいです。

私がこの作文を書き公表する事によって、一人でも多くの人に場面緘黙症を知ってもらい、みなさんの周りにいるかもしれない場面緘黙症で苦しんでいる人の事を理解して寄り添ってもらいたいと思っています。



努力の積み重ね

太田市立城東中学校

二年 高橋 惺 蘭

私の姉は、ADHDという障害者です。この障害は、気が散ってしまったり、ミスや無くし物が多かったりするなどの不注意症状と、じっとしていることができないなどの多動性・衝動性症状があります。

私と姉は、小さい頃はとても仲良しだったと母が言っていました。一緒に公園で遊んだり、おままごをしたりしていたそうです。

しかし、お互いに小学校へ上がるにつれてだんだんと姉と衝突することが増えていきました。なぜお姉ちゃんはこんなに勉強ができないのか、なぜこんなにも簡単なことができないのか、私はそんなことばかり考えていました。姉とけんかをする度に私と母は話し合いをし、母は私に、

「お姉ちゃんはね、ADHDっていう病気だから他の子よりも成長が遅れてて、いろんなことがまだできないんだよ。だからね、優しくしてあげてね。」

と言われていました。でも、まだ小さかった私には、その場では「わかった。」と理解したつもりでも、すぐにまたけんかを始めてしまっていました。

小学校六年生になり、少しずつ姉の障害について、理解できるようになってきました。それでも、けんかは途絶えることはありませんでしたが、私は姉の病気を理解してあげようと頑張って努力しました。私は細かいことが気になってしまう性格なので、姉が物を片付けていなかったり、自分のやるべきことを

やっていたらなかったりしたら、つい口を出してしまいそうになるけれど、「お姉ちゃんはそのような病気なんだ。」「しょうがないことなんだ。」などと自分に言い聞かせていました。

私が中学一年生、姉が中学三年生になった頃、姉は高校受験のシーズンに入りました。父も母も私も、姉は無事受験に合格できるのか、合格したとしても学校まで電車で通学することができなのか、とても心配していました。けれど姉は一生懸命勉強をし、無事に合格することができました。電車の乗り降りも何回も練習しました。

そして高校一年生になり、現在、電車で学校に通えています。毎日学校にも遅刻せず登校し、学習にも一生懸命取り組んでいます。

私は、姉を尊敬します。たとえ自分が障害者でも、何事も諦めずに努力し、できなかったことをできるように一生懸命取り組んでいて、すごいと思います。姉も小さい頃は少しのことしか自分ですることができなかったけれど、毎日コツコツ努力し、今ではたくさんることができるようになりました。私は、姉と同じ障害者の人にも、姉のように何事にも諦めずに前に進んでほしいと思います。そして、努力は必ず実るということを伝えたいです。

もう大丈夫

前橋市立木瀬中学校

二年 木原 暁 輝

しい補聴器を買ってくれたり、毎日家事をしてくれたり、僕や兄の面倒をよく見てくれたりします。具体的に一つ一つ細かくあげたら、キリがありませんが、そのすべてに感謝しています。だから、もう心配していません。どのような困難がおとずれようとも、乗り越えて行きたいと思います。そして「もう大丈夫」を心の支えとして、周りの人達にやさしく接していきたいです。

僕は、生まれつき耳が聞こえずらく、補聴器が無いと会話ができません。生まれて、一

歳の時から、補聴器を付けていたので、違和感はありませんでした。小学三年生のころ、学校の先生に特別あつかいを受けたことがきっかけで、自分は周りの人達とは違うのではないか、と思うようになりました。そこから、少しずつ、悩みを強く感じるようになっていきました。もしかしたら、自分のせいで授業の進みがおくれてしまっているのではないか、話が聞こえなくて、聞き返してしまったり、逆に相手が僕の言葉を理解出来なくて、何度も聞き返されてしまったりして、授業を妨害してしまっているのではないかと思ったこともありました。また、友達との会話が聞

きとりづらく、誤解を招いてしまい、ケンカをしてしまうことも多くなりました。

中学になると、状況がガラリと変わり始めました。周りの友達や先生方が、特別あつかいせずに接してくれたのです。僕は、それがとてもうれしく感じました。そこから、悩みが一気に少なくなり、気持ちがとても軽くなったことを今でもよく覚えています。そして、今が一番楽しいです。

これから、僕はずっと補聴器をつけて生活して行かなければなりません。これまでの経験が自信になり、どのようなことも、必ず乗り越えられると信じています。

そして、今僕は、母にとても感謝しています。いつも病院につれていってくれたり、新

障害は「見る」のではなく「向き合う」

群馬県立伊勢崎興陽高等学校

三年 田 沼 優 月

私は精神科に入院したことがあり、今も通院している。私の中で「精神疾患」というのは良いイメージがなく、友達には言えないでいた。しかし、通院での出来事と母の一言でこの複雑な気持ちは消えていった。

外来には、毎月一度程のペースで行き、先生と学校生活などの日常の様子などを話している。その日は入院中に行った心理検査の結果を聞けることになり、母と二人で診察室に入った。どんな事が分かるのか知らなかったので緊張していた。四枚程の紙には、表やグラフ、文字が印刷されていた。先生が紙に書かれた内容を分かりやすく説明していった。納得できる事もあったが、私には「ただ理解できない事があった。それは「自閉症」

の診断が出た事だ。

そう先生に言われた時は、頭が真っ白になった。自閉症の事は少し知っていたけど、それが自分にあるとは思わなかった。ただでさえ、精神科に通院している事を追い目を感じていたので、なんとも言えない気持ちになっていった。いつもだったら先生との診察が終わると緊張が解け、母と楽しく話すが、この日はなんだか気まずくて母とはほとんど話さなかった。

しかし、母は私が思っているよりも重く受けとめていなかった。「表に出していないだけで、意外と精神疾患を持っている人は多いんじゃない？今の世の中、言いつらい所もあると思う。」と母が言ったからだ。私はその言

葉に納得したし、母がそう受けとめていることに少し嬉しかった。

確かに今の世の中、「私は精神疾患をもっています。」と言うには勇気がいると思う。また障害の程度もあるので、気づかずに日常生活を送っている人もたくさんいるのではないかなと思った。私も、精神科に入院しなければ自分が自閉症なんて気づかなかったと思う。自閉症と聞いて、私は一人のピアニストを思い出した。紀平凱成というピアニストだ。テレビに出ていたのをきっかけに知った。その時思ったのは、精神疾患があってもピアニストになれるのだと思った。今思うと、とても失礼な考え方だと思う。でも、こう思う人は少なくないと思う。凱成くんがピアニストになる道のりは決して簡単なものではなかったという。しかし、両親の支えがありピアニストという自分の病気を味方にした職業を見つげられた。私は、この両親はすごいと思う。私だったら、大切な人が病気だと知ったら、何もかも諦めてしまう。諦めないで息子の可能性を見つけた両親はすごいと思う。

母の一言で、精神疾患は決して特別な事ではないのだと知った。精神疾患をはじめ、多くの病気は誰にだってなりうるものだ。だから

ら、「精神疾患」と聞いて悪いイメージをもつのは間違っていると思った。

大切な事は、精神疾患だけでなくどんな病気でも外見を「見る」のではなく「向き合う」事なのではないかと思う。特に精神的な病気だったら、どうやったらいかにその病気を障壁にすることなく人生を生きて行くか。周りに障害をもっている人がいるのなら、どう支えたら本人が楽しく幸せに生きていけるか。

私はもともとの病気と、今回分かった軽度の自閉症を持っているが、今とても幸せだ。それは自分でその障壁をうまく回避しているのと、周りの人の支えがあるからだ。そう思うと、病院の先生方や学校の友達、家族に感謝しなくてはと思った。

私は将来、精神面でも関わる作業療法士という職になろうと思っている。障害があり、苦しんでいる人はたくさんいる。私はその人たちに、生きてきて良かったと思ってもらいたい。それは難しいことだけど、少しでも力になれるようサポートしていきたいと思う。



学び、得た知識を。

群馬県立安中総合学園高等学校

三年 関 朱 里

少し前まで、障害に対しあまり良い印象を持っていなかった。それは障害についての知識不足や、障害者の方との関わりがなかったことも理由だ。マイナスイメージではなく、正しい目線で障害者の方と向き合いたい。私が障害について学び、得たこと、自分にできることは何か考えるきっかけになった出来事があった。

私の通う学校は、様々な専門分野の学習が可能な総合学科であることが特色だ。私は介護・福祉を学ぶ系列に所属し、介護の知識や技術の向上を目指し、学習に取り組んでいる。その学習の中で、障害について学ぶ授業があった。様々な障害を学んだが、その中でも聴覚障害について関心を持った。音が聞こえ

ない・聞こえにくいことは、突然の人や物の接近に気づきにくい。また、どのように人とコミュニケーションを取っているのかも気になった。そこで聴覚障害の方のコミュニケーションについて調べてみた。

主なコミュニケーション手段は口話や筆談、空書、ジェスチャー、手話、補聴器の使用が挙げられた。コミュニケーションの手段は一つではなく、複数あることが分かった。もちろん、聴覚障害者の方がどの手段を使って会話をするかは一人ひとり違う。そのため、これらの手段を話し相手に合わせて臨機応変に使い分けられることが、聴覚障害者の方と関わる上で求められる。一人ひとりのコミュニケーションを理解して接する姿勢が大切だと考え

た。

筆談や空書、ジェスチャーは私たちも普段の日常会話で使うことがある。しかし、使う機会もなく、使用するには知識が必要になるものもある。それが手話だ。

学校の授業で聴覚障害者の方に講義をして頂いた。その方はろう者で、通訳者の方と手話を使って会話をしており、度々笑顔になる様子も見られた。私たちは通訳者の方の手話通訳により、講義の内容を理解することができた。

講義では、幼い頃から今まで生きてきた中の苦労や大変さを話してくださいました。しかし悪いことばかりではなく、ろう者ならではのこともあったという。「コンサートホールなどの場では、健常者は会話を控えていることが多い。でも私たちは手話を使って会話ができる。席が離れていても可能だ。」と笑顔で話してくれた。苦労を経験した話が多い中で、笑顔で話してくれたその話は今でも強く記憶に残っている。

また、講義の中で手話の体験をした。私は小学校の頃に手話をしながら童謡を歌った経験がある。その他、自分の名前を指文字で表すことができる程度で、本格的な手話をする

のは初めてだった。講義で体験した手話では、自分の名前を指文字で表すほかに、挨拶や自己紹介、数字の数え方、地名、その他様々な単語の表現を学んだ。普段使うことのない指の使い方に苦戦しながらも、挨拶から自己紹介まで簡単ではあるができたようになった。

私たちの手話を見て、講義をして頂いた聴覚障害者の方が領いたり、リアクションしてくれた時は、相手に伝わったことが分かりとても嬉しかった。私たちが体験した手話はほんの一部であるため、実際に会話ができるようになるにはまだまだ知識不足だろう。この体験で手話に対して興味を持った。今後、手話を使って会話ができるようになりたいと思う。そのためにさらに多くの知識を身につけていきたい。

健常者が普段手話を使う機会は少ない。だが手話を使える健常者が増えれば、聴覚障害者の方がより暮らしやすい社会へと変化していく。そうすれば健常者と聴覚障害者の方の距離が縮まるのではないだろうか。私はそう考えている。

私の将来の夢は看護師だ。多くの人の命を救う手助けをしたい。また、身体のケアはもちろん、心のケアも行い、心身ともに支えて

いきたいと思っている。障害がある人もない人も尊重し、医療面で支えていきながら、障害について学んだ知識を医療現場でも生かしていきたい。手話が必要とする場面もあるだろう。その時は、私が積極的に行動したい。

同じ世界に生きるものとして、障害があってもなくても互いに尊重されるべき存在である。そのため、偏見から差別するようなことはあってはならない。また、健常者と比べて苦勞も多い分、笑顔で過ごせる時間が増えてほしい。そして、その時間を私たち健常者が作っていくことがこれからの社会に必要な。障害者の方が楽しいと感じる時間が増え、人生が笑顔あふれるものになれば良いと思う。そんな時間が健常者と共にあれば良いと強く願う。

コロナ禍で暗い日々が続いているが、障害がある人もない人も共に支え合い、この危機を乗り越えていきたい。その先には、障害者と健常者の境界線がない、「共生社会」の実現した明るい世の中が待っていることだろう。



偏見

群馬県立安中総合学園高等学校

三年 小澤 耀 加

私には、来年度中学生になる知的障がいのあるダウン症の従兄弟がいます。その従兄弟は近くに住んでいるので、よく公園に行ったりして遊んでいます。ここで、私が小学校六年生のときに体験した話をしたいと思います。私が体験した出来事は、従兄弟といつものように公園で遊んでいたときに、近くにいた小学校高学年くらいの女の子たちが従兄弟をみて、

「この子障がいだよ。」

「やだ、離れたところで遊ぼ。」

と従兄弟にも聞こえるような声で言ってきました。まだ従兄弟は小さかったので、言葉の意味は理解していませんでしたが、それを聞いた私は「なんでそんなことを言うの」と思い

ました。でも、その女の子たちに何も言うことができませんでした。今でもこの出来事を思い出しては「なんであのとき女の子たちに何も言うことができなかったのだろう」「や」「できることはたくさんあったのに」と後悔しています。しかし、このような体験をし、さらに障がいについて理解をしようと従兄弟と関わる時間を増やしたり、また同じようなことが起こったときにどのように対応をすれば良いのかを考えるようになりました。

高校生になった今、私は身近に障がいのある従兄弟がいるから「なんでそんなことを言うのだろう」と思うのかもしれないが、身近にいない人にとってはどのように接したら良いのかや、もしかしたら何かされるかもと

思うのではないかと感じました。学校の授業などで勉強をしても、目に見える障がいだけでなく目に見えない障がいもあるので、全部を理解するのは難しいと思います。しかし、一人ひとりが理解しようと努力すれば、障がいの有無に関わらず住みやすい街づくりができると思います。

では、障がいの有無に関わらず住みやすい街をつくるためには、どうしたら良いのかを考えてみましょう。

まず一番大切だと思うのは、障がいがあることに対する偏見や差別をなくすことだと思います。偏見をなくすためにその人の障がいについて理解することやその人の立場に立って考え自分から行動をするなど、できることからやっていくことが大切だと思います。

次に、バリアフリーを増やすことだと思います。今の日本には電車とホームの隙間や滑りやすい床、音声のみのアナウンスなど、まだまだたくさんバリアがあることがわかります。バリアをなくすために私たちができることは、電車とホームの隙間をなくしたり、大理石や磁器タイルのような水をはじく床材を使わない、アナウンスが流れたときに近くにいる人が筆談やスマホに文字を打って伝え

ることなどがあります。すぐに取り組めることから少し時間がかかるものまでありますが、一人ひとりが取り組めば、みんなが住みやすい街づくりができると思います。まだまだ課題はたくさんあるので解決できればいいと思います。

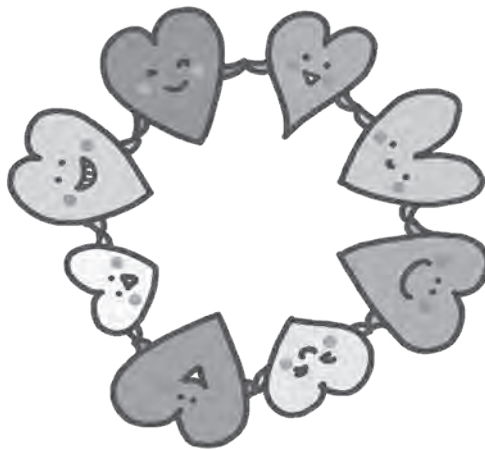
従兄弟は周りの子より少し成長がゆっくりで苦手なことも多いですが、私たちと変わらないのです。成長がゆっくりでも、少しずつ少しずつ従兄弟のペースで成長をしているので、偏見や差別をするのをやめてほしいです。

私の友だちは従兄弟と接するときに、いつも私と話すように話しかけてくれます。まだ従兄弟は、はっきり話せませんが、その友だちは真剣に従兄弟の話聞き、理解しようとしてくれました。その時の従兄弟はとても嬉しそうに顔をされていて、私まで嬉しくなりました。障がいがあるからといって接し方を変えられることは、従兄弟にとって壁を感じてしまうのではないかと思います。

従兄弟と同じ保育園に行っていた子や従兄弟と同じ年の私の弟は、小さい頃から接しているのに、従兄弟が苦手なことや困っているときは手を引いて優しく教えてくれたりしています。誰かに言われたわけではなく、先生

たちの真似をして自分から行動できる従兄弟の友だちを見習いたいと思いました。このように、小さい頃は吸収する力が高いので、小さいうちから障がいについて教え、困っていたら助けてあげてくれるのが大切だと思います。

私が小学校六年生のときに体験したようなことが、今後起きてほしくありません。例えば悪気がなくても傷つく人はいます。みなさんも、相手のことを理解し、みんな違うことを認め助け合いましょう。



心の輪を広げる体験作文

【肢体不自由児協会会長表彰】



一人一人が平等に生きられる環境を

太田市立宝泉小学校

六年 北 爪 陽 菜

障害者への差別はあって良いのでしょうか。

ある日、私は、家族といっしょにショッピングモールへ外出していました。そこには大勢の人がいました。その大勢の「健常者」の中に数名、車いすに乗っていたり、足が義足だったりする「障害者」がいました。私は最初はびっくりしたけれど、もしすれ違ったり、エレベーターに乗ったりする時には障害者を優先しようと決めました。

その後、車いすに乗っている人とすれ違う場面があり、道をゆずろうと思ったとき、ほとんどの人が、はじによけていたにもかかわらず、何人かの人はそんなこと気にせず、その場に居座っていました。それを見て私は、障害者のことをもっと考えてほしいと思いま

した。

その後にも、義足の人とすれ違った時、その人が通りすぎた後、何人かの人が、「怖かった」という声や、「障害者がいると、毎回道をゆずらないといけないから大変」という声を発していました。私は、その言葉を聞いてとてもショックを受けました。障害があるだけで、健常者と他は変わらない一人の人間だからです。それなのに、障害があるだけで、健常者とあつかいが変わってしまうのでしょうか。

私は、その出来事があってから、障害者という人たちに興味をもちました。他にはどんなことで差別されてしまったのか、また、障害者が、健常者と同じように快適に過ごせる

ようにするにはどうしたらよいか、そんなことを調べることが多くなりました。

障害者は、障害があるだけで、他は健常者と変わりません。それなのに差別したりする人がいるのです。私がもしも、障害者だったとしたら、悔しくて、悲しくてたまりません。こんなことが起こってしまうのは、健常者が障害者のことをちゃんと理解していないからなのではないでしょうか。一人一人がもっと障害者のことを理解していき、少しずつ障害者も健常者も平等に生きられる環境をつくっていくことが必要だと思います。

ケガをきっかけに

太田市立城東中学校

一年 工藤 香乃

私が五年生の時、体育の授業で出来なかった足かけ回りを休み時間に友達と練習していた。勢いよく足を振り上げた時、「ボキッ」という鈍い音と共に痛みが走った。悪い予感がした。その予感的中し、足首を骨折して、その日から松葉杖生活が始まった。

今までも、障害者の人を見ると、大変だろうなとは思っていたが、実際に一人では歩く事も出来ない、トイレもお風呂も入れない立場に立つ事になって、大変さが身にしみてわかった。昨日までは、普通に出来ていた事が出来ない、もどかしさ、辛さもよくわかった。一方、人の手を借りないと生活出来ない中で、助けてくれる家族、先生、友達のありがたさも強く感じた。

そんな生活が続く中で新たな発見もあった。普段行く、ショッピングモールやスーパーにも車いすが貸し出されている事を知った。今までは、目を向ける事もなかったけれど、エレベーターのボタンが低い位置に付いていたり、エスカレーターが階段になっていない事で、車いすでも乗り降りする事が出来た。

私のケガは当初は、二ヶ月半くらいで完治するだろうと言われていたが、冬場だったせいもあり、なかなか完治する事が出来ずに四ヶ月近く経っていた。そんな時、手伝ってくれている友達から「いつになったら治るの?」と聞かれた。おそらく友達は悪気などなかった。でも、私はとてもショックを受けた。いつまでも手助けをしてもらっている事に罪悪

感を感じてしまった。

結果、私は半年かかり完治する事が出来た。その時は、普通に生活出来るありがたさを感じたけれど、やはり時が経つと当たり前になっってしまった。でも、私のように、完治する事の出来ない障害のある人達は、不便な生活がずっと続くのだ。だからこそ、健康な私達が差しのべられる手は、差しのべないとならないと思う。そして、もっともっと障害のある人が住みやすい社会になるように、考えていきたいと思う。

私は、このケガをきっかけに感じた事を忘れずに、これからも過ごしていきたい。

障害者週間のポスター

【知事表彰】





最優秀賞
「みんながくらしやすい社会」
前橋市立天川小学校
5年 三澤 優太



最優秀賞

「自由に動ける社会へ」

高崎市立第一中学校

3年 水出 向日葵



優秀賞

「身近なマークを手の上に」

館林市立多々良中学校

2年 佐藤 彩未



佳作

「みんなが暮らしやすい社会」

太田市立東中学校

3年 坂岩 日和

……豆 知 識……

手足の不自由な人のために

○階段で車イスの昇り降りを手伝うときは、二・三人で昇りは前向き、降りるときは後ろ向きで、車イスの人が落ちないように気をつけましょう。

○松葉杖の人や義足の人などが乗り物で困っているのをみかけたら、進んで席をゆずりましょう。

○雨の日は松葉杖の人が困る日です。傘はさせないし、足下はすべる危険もあります。松葉杖の人を見かけたら、守ってあげましょう。

○手足の不自由な人を見かけても、すぐ手を貸す必要はありません。困ったときや助けを求められたときに、はじめて手を貸してあげてください。

手足の不自由な人たちは、人に迷惑をかけるのを、とても心苦しく思うのです。それだけに、こまやかな心づかいが必要です。

令和四年度

「心の輪を広げる体験作文」

「障害者週間のポスター」

作品集

令和四年十二月 発行

発行所 群馬県健康福祉部障害政策課

群馬県肢体不自由児協会

〒三七二八五〇 前橋市大手町一―一―一

☎〇二七(二二六)二六三四